

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：32642

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870749

研究課題名(和文) 両大戦間期におけるトルコ共和国の国際協調外交と民主主義の相克

研究課題名(英文) Contradiction between the international cooperative diplomacy and democratic politics in the Republic of Turkey during the inter-war period

研究代表者

宇野 陽子 (UNO, Yoko)

津田塾大学・付置研究所・研究員

研究者番号：60459310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：トルコ共和国建国から初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクの在任期間は、世界史的にはほぼ戦間期と呼ばれる時期と重なる。この時期、トルコでは20年代にはイギリスを中心としたポスト第一次大戦国際政治体制に対する反発や独立性が根強く見られたが、30年代には、かつてイギリスの帝国主義的国際政治体制の象徴とトルコでみなされていた国際連盟に加盟するなど、国際協調外交の傾向があらわれた。他方で、中央集権体制や民族主義の強調といった全体主義への傾斜も見られ、その中でフェミニズムのような社会運動が抑圧されていったことがわかった。

研究成果の概要(英文)：The beginning period of Republic of Turkey, which is also the tenure of Mustafa Kemal Ataturk as the first president, overlapped the inter-war period in the view of international politics. In Turkey, especially in 1920s, Ataturk government still kept their repulsion and independence against the international agreement system of post-WWI, which was built by mainly Britain. But in 1930s, Turkish government began to get close to the international cooperation politics, and they decided to join to the League of Nations that had been seen as the symbol of the post-WWI international political and imperialistic system produced by Britain. Within Turkey, however, social movements such as feminism movement have been oppressed due to the Turkish government's inclination to totalitarianism which comes together with centralized political system and emphasizing of ultra-nationalism.

研究分野：地域研究

キーワード：トルコ 戦間期 国際協調外交 民主政治 社会運動

1. 研究開始当初の背景

中東では 2011 年の「アラブ革命」は民主政治を求める民衆の蜂起ではあったが、他方で、結果としてシリア内戦やそれに続く IS (いわゆる「イスラーム国」) の跋扈、難民の大量発生といった不安定な情勢をもたらすものでもあった。その中でトルコは、比較的欧米寄りの外交政策や安定的な政権、そして世俗主義的な政治体制といった面で、中東における安定要因とみなされてきた。

こうしたトルコの体制は、基本的にはケマル期以来続くトルコの国際協調外交や近代主義的な政治体制の結果であり、また同時に国際政治・比較政治的観点からは西側諸国との良好な関係という文脈で、前向きに評価されてきた。しかし、より詳細なトルコの国内政治に関する学術研究においては、こうした国際的評価とは逆行する社会と国家の相克が近年とみに指摘される事態となっていた。

そこで、研究代表者宇野は国際関係学的観点からトルコの近現代史研究を行ってきたことから、このトルコの国際的評価と国内史的研究における評価のずれをより実態的に解明するには、そもそも国際協調的外交は国内政治の文脈でどのように受け止められ、どのような影響を国内政治に与えることになったのかを明らかにする必要があると考えた。また、時期としては、まだトルコの国際協調的外交の基盤が築かれたものの、いまだ第一次世界大戦の影響により反英的世論が強かったトルコ共和国建国期が適切と考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦間期において、新興国民国家トルコ共和国が当初持っていた国際秩序に対する敵対的姿勢から順応に向かう国際政治上のプロセスを明らかにするとともに、これが国内政治では軋轢を生み、その結果中央集権化や権力の寡占化が進み、民主主義を減退させる要因になったことを解明

することであった。従来個別に議論されてきたトルコの国際協調外交の進展と内政における民主主義の後退とを国際関係史的視点に立って関連付けて再検討することにより、近年中東における有望な民主化モデルと位置付けられるトルコ的外交と政治がはらむ矛盾を明らかにすることにあつた。

調査の過程で、上記の目的に加えてより具体的な研究目標が設定されることとなった。それは、トルコ外交が 1930 年代に内包した二重性に起因する。すなわち、トルコは国際連盟加盟に代表されるような国際協調外交への転換を見せると同時に、ドイツのナチス政権やイタリアのファシスト政権のような全体主義への傾斜も明らかになっていたのである。従って、新たに国際協調外交には含まれない外交方針と、それに起因する国内政治への影響も考察することとなった。

加えて、国内の民主政治との関連についても重要性が認められる社会運動が明らかになってきた。その代表がフェミニズム運動であった。フェミニズム運動はケマル政権が推進していた近代化政策と基本的には一致した方向性を持ちながら、運動としては抑圧されていた。この原因の一端をトルコ的外交方針と関連付けることがより具体的な目的として設定され、追究された。

3. 研究の方法

本研究では、トルコを初めとする関係各国の公文書及び当時の刊行資料の収集・調査を通じて、下記の方法で研究目的を達成しようと考えた。

(1) トルコ議会議事録及び刊行資料(主要な新聞、雑誌など)を精査し、当時の主たる外交問題に関するトルコの議論を整理し分析する。

(2) トルコの主要な政治家・思想家らの回想録や新聞を精査し、トルコ共和国初期の反ケマル派に対する弾圧の実態について詳細

に調査する。

(3) 関係各国(主にイギリスとアメリカ)の外交文書等を精査し、トルコに関する現状認識や、国際秩序形成におけるトルコの役割に関する構想を調査する。

4. 研究成果

本研究が目指していた研究の目標は、大きく分けて下記の3点にあった。すなわち、戦間期におけるトルコの国際協調的外交への転換がもたらした国内的影響、国際協調外交には含まれない外交方針の変化がもたらした国内的影響、外交の変化に由来する国内的影響のうち、民主主義の後退の実態解明である。このうちについては、調査の過程で判明したこととして、全体主義への傾斜がトルコ社会に与えた影響の大きさがあり、それを反映させる形で第2の目標と位置付けた。

本研究課題期間中にについては一部の実態を明らかにすることができた。それはフェミニズム運動の抑圧が、全体主義への傾斜を梃子にして行われたという事実である。フェミニズム運動の抑圧とケマル体制の中央集権化の問題については、トルコにおけるフェミニズム研究の分野ではごく一部の研究者が指摘していたことであるが、国際関係論との架橋によって、ケマル体制の外交方針と社会運動の抑圧との間に相関関係があることが認められた。今後はさらに、フェミニズム以外の社会運動や、国家フェミニズムの対応などに視野を広げて追究していく。

また、については本研究課題期間中に行った海外調査によって多くの資料を収集でき、その整理を行ったところである。予想外に大量の資料が入手できたことで、結果的に研究課題期間中に成果を発表できなかったことは痛恨の極みであるが、今年度以降に積極的な成果発表を行っていく所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

宇野陽子、トルコ国民解放戦争期(1919-1923年)におけるケマル体制の構築：国際政治と国内政治の関連に注目して、西洋近現代史研究会会報、査読無、27号、2013、4-7、

宇野陽子、トルコ共和国政治史におけるイスタンブル・ゲズイ運動の位置：新たな政治的オルタナティヴへの模索、国際関係学研究、査読無、41号、2015、45-58、
宇野陽子、トルコの近代化テーゼにおける女性：女性参政権に注目して、共同研究プロジェクト成果報告書：イスラームと価値の多様性 ジェンダーの視点から、査読無、なし、2015、96-107

[学会発表](計5件)

宇野陽子、抵抗運動から国民解放戦争へ 第一次世界大戦後オスマン帝国における政治運動の多様性と糾合、第29回日本中東学会、2013年5月、大阪大学(大阪)

宇野陽子、イスタンブル・ゲズイ公園抗議活動とトルコ政治：『アラブの春』と『オキュパイ運動』の交差、ヨーロッパを知る連続セミナー、2014年7月、千葉商科大学(千葉)

宇野陽子、トルコの近代化テーゼにおける女性：女性参政権に注目して、笹川平和財団共同研究会、2014年9月、桜美林大学(東京)

宇野陽子、オスマン帝国末期知識人のオスマン帝国観に関する一考察：ウィルソン原則協会に注目して、東洋文庫イスラーム研究班トルコ班研究会、2014年12月、東洋文庫(東京)

宇野陽子、アタテュルクと女性たち：『脱イスラーム』は女性を解放したのか、公開シンポジウム「イスラーム・女性・ジェンダー：価値の多様性とダイナミズ

ム』、2015年3月、明治大学駿河台キャンパス（東京）

〔図書〕（計1件）

粕谷元、宇野陽子、岩坂将充共訳、「〔全訳〕トルコ大国民議会内規」『全訳 イラン・エジプト・トルコ議会内規〔八尾師誠、池田美佐子、粕谷元（編）〕』、東洋文庫、2014年、411（157-216）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

宇野 陽子(UNO, Yoko)

津田塾大学・国際関係研究所・研究員

研究者番号: 60459310